

ペラルゴニウムの2月末開花を目指す栽培方法

島田有紀子・西山岩平

2月26日から開催された「ゼラニウム展」では、一般にゼラニウムと呼ばれる *Pelargonium zonale* hybridsの他にも、ペラルゴニウム属に属する約170品種約350鉢を展示した。*P. grandiflorum* hybridsは通称ペラルゴニウムとして親しまれ、ゼラニウムよりも大輪で華やかな花を咲かせることから人気が高い植物である。しかしながら、ゼラニウムが四季咲き性であるのに対し、本種は5~7月に咲く一季咲きの性質をもち、2月下旬から始まる展示会に合わせて開花させるためには、促成栽培が必要となる。塚本(1989)によると、本種は低温要求をもつ長日植物であるが、これまでの観察から、15℃以下の低温に遭わせずに長日処理しても全く開花しないことが分かっている。これらのことを踏まえ、1999年度は以下のような栽培を行った。

主な栽培管理

株の養成

5月に天芽挿しまたは胴挿しを行った。ゼラニウムの場合は挿し穂の切り口を十分に乾すことが必要であるが、ペラルゴニウムはカッティングした後直ちに培地に挿すか、あるいは水揚げを行ってから挿す方が活着がよい。用土には赤玉土、腐葉土、ピートモス、ぼら土微細粒を混合したものにタチガレエース(三共株式会社)を適量加えたものを用い、4号鉢に2~3本挿しとした。約1~2ヶ月で発根がそろい、7~8月に摘心を行った。花芽形成に必要な低温に遭遇するまでに側枝を十分発達させるため、9月上旬までに摘心を終えた。真夏は50%の遮光をした。9月上旬、挿し木に用いたものと同様の土にマグアンプKを5g/l加え、5号鉢に鉢上げした。その後、固形肥料(8-8-8)を置き、さらに2週間に1度液肥(20-20-20)2000倍を与えて栽培し、10月下旬に6号鉢に鉢上げした。

促成と結果

11月中旬まで戸外で栽培し、その後無加温のビニルハウスに搬入して栽培した株を、1月4日から、最低温度を15℃に加温し、自然日長または17時間の長日としたガラス温室に移して栽培した。その結果、開花時期には日長による差がみられなかったが、17時間日長下で栽培した場合、自然日長下で栽培し

たものに比べ、節間が伸びて草丈が長くなった。特に、高性種であるHula、JoyおよびJoysではその影響は著しく、品質が若干劣るので、自然日長下での栽培が望ましいと思われた。ただ、本種は長日植物と報告されていることから、低温遭遇が不十分な場合は長日処理が開花を補足的に促進するのもかもしれない。年によっては暖冬で低温遭遇が不十分な場合もあり得るので、長日処理も効果を示すことがあるだろう。以上の栽培方法により、2月26日までに、26品種のうち6品種が開花し、その他の品種もすべてつぼみが色づき、展示開始後まもなく開花した。花芽形成に必要な低温遭遇の程度は明確でないが、加温開始時期をもう少し早くすることで、より早い開花が望める可能性もあり、今後検討する予定である。表に開花時期と草丈を示した。なお、第3花まで展開したときを開花とみなした。

引用文献

塚本洋太郎, 1989, 園芸植物大辞典, 小学館.

表. ペラルゴニウム26品種の開花時期と草丈.

開花時期	品 種 名	草丈
2月第3週	Easter Greeting	低
	Gaiety	中
	Mme. Leyal	中
	Morning Glory	中
	Salmon Splendor	中
2月第4週	Hula	高
3月第1週	Cha Cha	中
	Dark Venus	低
	Gernet Winks	中
	Giant Butterfly	中
	Joan Morf	中
	Joy	高
	Joys	高
	Lavender Gibson Girl	中
	Lavender Grand Slam	低
	Mint Peal	高
	Murasakishikibu	高
	New Gypsy	高
	Pink Chiffon	高
	Pink Fashion	中
	Sierra Top	中
	Stroubery Sandae	高
Sunrise	中	
Sunshine	中	
Varenciana	中	
3月第2週	Grand Slam	低

1999年11月中旬から無加温ハウスで栽培してきた株を2000年1月4日から最低夜温15℃のガラス室に移し自然日長下で栽培。草丈：高；40cm以上、中；20~40cm、低；20cm以下。